

死者の土地

かたりへの太平洋戦記

菊村

かたりへの太平洋戦記

死者の土地

菊村 到



光人社刊

死者の土地〈かたりへの太平洋戦記〉

昭和54年9月14日 印刷

昭和54年9月30日 第1刷

定価 980円

著者 菊村 到 (きくむら いたる)

発行者 川島 裕

発行所 株式会社 光人社

東京都千代田区九段北1-9-11

振替番号／東京7-54693番

電話番号／東京03(265)1864～6

本文印刷 慶昌堂印刷株式会社

色彩印刷 有限会社興仲社

製本所 有限会社松栄堂製本所

乱丁、落丁のものはお取り替えいたします。

© 1979 Itaru Kikumura

0093-10072-2241

『死者の土地』目次

死者の土地 5

艦影見ゆれども 23

処刑の森 39

無名戦記 57

英雄たち 75

小さな戦場 103

赤い服の日本兵 115

生き残った男 131

天皇陛下万歳！ 145

硫黄島の太陽 181

洞窟の生存者 193

屠殺者 221

あとがき 273

解説 276

カバー・扉絵
依光
隆

死者の土地

〈かたりべの太平洋戦記〉

死者の土地

市木が廃墟のような中トラック飛行場に、一式陸上攻撃機で降り立ったのは昭和十九年十二月のはじめで、ほぼ三週間後に少尉に任官した。

海軍予備学生として鹿児島島の航空隊に入隊してから一年とは経っていなかった。

中トラックの飛行場に降り立ったとき、市木をとらえたのは死の予感であった。ここでは、すでにすべてが疲れはてているように見えた。

市木はマルコット部落の民家に住みついた。マルコット航空基地の指揮所は粗末なニッパ・ハウスであり、そこには電話と対空無電機材が持ち込まれているにすぎなかった。敵の空襲はじつに頻繁で執拗であり、市木たち地上勤務の要務士にできることと言えば、鉄帽をかぶって塙壺（はなづか）に身をひそめることくらいのものであった。

のちに、指揮所は、より安全と思われるマルコット川の岸辺に移動した。

年が明けて一月になると、米軍はすぐリンガエンに上陸を開始し、驚くべき速度で侵蝕して来た。マルコット基地の友

軍機は、さっさと引き揚げてしまい、市木たちは置き去りにされる恰好になった。こうして酸鼻をきわめた山中での放浪生活へと追いつめられることになる。

飛行機は一機残らず飛び立ってしまい、搭乗員たちはエチアゲの方にトラックで運ばれてゆき、航空隊は事実上解体してしまったので、残った地上勤務者で陸戦隊が編制され、市木は第七戦区本部というのに組み入れられた。

本部は、敵の進攻につれて後退し、森林地帯に小屋を建て、穴を掘り、陣地を構えた。マニラ街道には土民のゲリラが出没し、食糧輸送のトラックはじつにしばしば襲われた。トラックが黒煙を吐き、炎を吹きあげているさまが、見張所から望見された。

燃えていると言えば、ここではすべてが燃えていた。砲撃と爆撃が絶えず繰り返され、あちこちの山からは炎が立ちのぼり、木々は焦げ、集積された倉庫の板に火がついてぶすぶすくすぶり、白煙をあげた。

友軍が随所で敗退し、戦死者は続出した。

ある夕方、フィリピン人の男がひとり、小屋のほうに歩いて来るのを市木は見た。もう少し前までは陸軍のほうでは、現地人を使役に使ったりしていたが、最近ではフィリピン人を見ることは珍しかった。

そのフィリピン人は、市木と眼があうと、白い歯を出して笑った。

「憲兵伍長の犬野です」

と男は歯切れのよい日本語で言った。

かれはフィリピン人と見まごうばかりの人相風体だが、ひょいと上衣を持ちあげた時に裾の下に拳銃が忍ばせてあるのが、市木の眼にふれた。

「このへんに、フィリピン人がまぎれこんで来ませんでしたか」

「いや、見なかったな」

「それならいいんですが」犬野はするどい目つきで、あたりをすばやく見渡した。「やつらはまず、ひとり残らずゲリラですからね、見つけないで撃つことにしています。もし、見つけたら、かまわんですから、やって下さい」

犬野はそう言うのと、また白い歯をちらりと見せ、すぐに身をひるがえして山道の茂みに消えて行った。

翌日のひるすぎ、参謀本部の金沢中佐がやって来て、第七戦区の士官をあつめて陸戦のための講義をした。もともとこれといった内容のものはなく、中佐の話はいちじるしく生彩を欠いていた。

敵の用いている戦車はいわゆるM4というやつで、円錐爆雷とか棒地雷などではまったく歯が立たないということを中佐は、いくぶん投げやりな口調で言った。

「それではどうすればいいのですか」

と浦少尉がいらだたしげに質問を發した。この浦という男は、市木とは大井海軍航空隊時代からの仲間だったが、市木はどうも浦とは肌が合わなかった。

暴力的な校風をもつて知られている私大の出身で、かれ自身唐手三段、柔道二段と称してい、弱い者いじめが好きで、お坊ちゃん育ちの市木はどういうものか、よくこの男にねちねちとからまれたり、いじめられたりした。大井海軍航空隊を出て、この男とも別れたのだが、フィリピンでまたいっしょになってしまった。浦少尉もやはり要務士である。大体要務士には、体の弱い者や搭乗員としての適格性に欠けた者がまわされるわけで、浦のような男がどうして飛行要務学生として入って来たのか、市木には分からなかった。

浦はファナチックなところがあり、酔うと、

「ひとりでも多く敵を殺して死のう」

と絶叫したり、ふだんでも何の関連もなく突如として大声で号令調整を試みたりした。そういう時のこの男は、どこか滑稽で、そしていくらか悲しげに映った。

浦が、それではどうすればいいのですか、と言ったとき、金沢中佐はじろりと浦に一瞥をあたえて、

「分からんね」

とひややかに答えた。

この集会がとかれて三十分ほどしたとき、B24の編隊が飛

来した。市木は、山の斜面に自分で掘った壕の中に飛び込んだ。それは一人用の小さな穴で、市木はひそかにそこを自分専用のものと決めていて、そこに身をちめてうずくまっていると、奇妙な安らぎをおぼえた。市木がその小さな穴に身を閉じこめた直後、突然、黒いものの影がすべりこむようにして飛びこんで来た。

その穴はもうひとり、入れるくらいのスペースはあるにはあったが、ふたりの人間を押しこむには窮屈であった。飛びこんで来たのは、もちろん人間であり、市木の体にはげしくぶつかって来た。市木は反射的にその人間をおしのけようとして、やめた。他人をこばむわけにはいかなかった。

おや、と思った。その人間の体は、しなやかで、やわらかだった。日本の兵隊のものにはない感触があった。それは十五、六のフィリピン人の少年で、大きな熱っぽく光る眼をいっばいに見ひらいて、

「ゴメンナサイ」

とはっきりした日本語で言い、白い歯を見せてにやりと笑った。その笑った口もとが、市木に大野という憲兵伍長との出会いを思い出させた。

どうしてこんなところに突然、こんな少年がまぎれこんで来たのか、市木には分からなかったが、あのとき、大野がさがしていたのはこの少年だったのではないかという考えが、市木にひらめいた。

あのとき、大野は現地人はみんなゲリラ化しているから、見つけしだい殺せと言った。この少年もそういう危険な存在のひとりなのだろうか。

「どこから来た？」

「マバラカット」

少年は答えた。父親も母親も空襲で死に、かれはひとりきりになって逃げて来たというようなことを、片言の日本語と英語と身振り手真似で言った。

少年は、ノオ・パデル、ノオ・マデルと言ったが、パデルが父親を、マデルが母親を意味するらしいことは理解できた。しかし、その告白の真実性は、大いに疑わしかった。

少年は狭い穴ぐらの中で、市木にびったりと体を寄せ、手足を猿のようにちちこめて眼ばかり光らせていた。そうやって体をくっつけあっていると、お互いの体温が移って、そのぬくもりのために溶け合うものがあった。少年の体はわずかにふるえていた。

B 24が飛び去り、危機が過ぎたあとも少年は市木のそばを離れようとはしなかった。少年はひどく腹をすかせていて、市木が乾パンをあたえようと、その白い硬いけもののような歯で精力的に噛み砕き、のみこんで行った。

この頃はすでに食糧も欠乏しはじめていたし、その貴重な乾パンを正体不明の少年にあたえるということに、強いためらいはあったが、市木は珍しい動物に餌をあたえて、その食

べっぶりを観察する楽しみに似たものを代償に得た。

少年の存在が、浦の眼にとまらぬわけはなかった。浦はふらりと市木のところにやって来て、

「市木、貴様は猿を飼つとるそうじゃないか」

と言った。

浦の暴言は許しがたかったが、確かに市木は野生の動物を飼育する楽しみを味わっていたのだから、文句のつけようがなかった。

少年は市木に対してはまったく従順であったから、市木は少年がいつか何かの役に立ってくれるだろうという期待もひそかに抱いていた。

「猿って、エンリコのことか」

市木は少年の名前を口にした。

「エンリコか何か知らんが、現地人に気を許すなと司令も言つとったぞ。あいつは、われわれの内情をさぐるために、派遣されて来たスパイかもしれない」

浦は市木をいじめる絶好の材料が黙っていてもころがりこんで来たことに、充分満足していた。

「それでも貴様は、猿に餌をやるのか」

「猿じゃない。エンリコだ」

市木が言うと、浦は鼻のさきで笑った。市木はエンリコがゲリラのスパイであってもかまわない、という気持になっていた。いまだらスパイされるべき何ものも、ここには残って

はいなかったし、ゲリラはそれほど組織化されているとも思われなかった。もちろん米軍が、現状においてこんな少年を日本軍陣地に差し向けると考えるのは滑稽であった。

「とにかくあいつを追いつせよ。貴様の手に負えなかったら、おれが始末をつけてやる」

浦は腰の拳銃を、右手で軽く二、三度叩いてみせた。

エンリコが風のように飛びこんで来たのは、そのときであり、かれは市木と向かい合って浦が立っているのを見て、一瞬身をすくませた。

「どうした、モンキイ・ボーイ」

と浦が言った。エンリコは走って来たとき、はげしく肩を波打たせていたが、

「アメリカン・ソルジャー」

とうしろの山の方を指さして言った。

市木も浦も、顔色を変えた。もしアメリカ軍が後方にまわりこんでいるとしたら、部隊は完全に退路を遮断されるわけで全滅するほかなかった。

しかし、いくら米軍の進撃が迅速で、破壊的であったにしても、こんなふう突如として背後に現われるということは信じ難かった。

「ワン・ソルジャー」

エンリコは言い、先に立って小走りに走りはじめたので、市木と浦はかれのあとをついて行った。

このとき、市木はエンリコの言葉に不審を感じなかったわけではない。ワン・ソルジャーとは、つまりアメリカ兵がひとりである、ということだろう。アメリカ兵がひとりで山の中にいるということは、どう考えても不自然であった。

あるいは斥候が何かなのだらうか。斥候にしても後方の山の中に現われるというのは、おかしい。エンリコは裸足でまったく猿のように身軽に山道を小走りに走ってゆく。破れたシャツや、汚れた半ズボンから出ている手や足は、胴体にくらべてやや不釣り合いに長く、くねくねしていた。その長い手足のリズミカルな動きを、背後から眼で追っているうちに市木は、はつきりと危険を感じた。

エンリコの魔術にかかって、おびき寄せられるのではないかという不安に照らし出されたのである。ひとりのアメリカ兵の代わりに、何人かのゲリラが密林に身をひそめているような気がしたのだ。

それで市木は、ふいにエンリコを追うのをやめて立ちどまった。それでうしろから来る浦の体とあやうくぶつかりそうになった。

「どうした」

浦に言われ、市木は言葉に窮した。浦に、それ見たことか、と言われそうだった。そのとき、浦が奇妙なうめき声を発した。

浦の眼は強く見ひらかれ、市木の背後の何かに向かってそ

そがれていた。市木も急いで首をめぐらした。市木もまた声をあげそうになった。

二十メートルほど前方の立木にもたれるようにして巨人が立っていた。その巨人と向き合う形で、エンリコが立っている。巨人は明らかにアメリカ兵であり、エンリコの言葉は嘘ではなかったのだ。

アメリカ兵は両手をあげると、緩慢な動作でそれを首のうしろにまわし、抵抗の意志を放棄したことを示した。

この人物が第七戦区における最初にして最後のただ一人の捕虜であった。かれはB24の搭乗員であり、かれの乗っていた飛行機は日本軍の高角砲に撃ち落とされ、山中に墜落したが、かれはパラシュートで脱出し、奇蹟的に生きのびたのであった。

市木と浦が知恵をしぼって、おぼつかない英語で尋問した結果、それが分かったことのあらましであった。

この男の処置について、市木と浦とのあいだで意見の食い違いを生じた。市木は男を生け捕りにして本部に引き立ててゆくことを主張し、浦は即刻、銃殺すると言い張った。

日本語でとりかわされたふたりの会話をまったく理解できないアメリカ兵は、さすがに青い眼を不安でいっぱいにして、小鳥のようにせわしく首を動かして、ふたりの表情から何かを読み取ろうとした。

突然、浦が、エンリコと呼んだ。エンリコは自分がそんな

ふうに名前を呼ばれたことで、かえってとまどった。

浦は、エンリコに部下の津田沼兵長を呼びにやらせた。

「いいか、ロープを持って来るように言うんだぞ。ロープ、分かるな」

「ロープ」

エンリコはうなずいた。やがてエンリコは津田沼兵長をともなつてもどつて来た。津田沼はロープの束を握りしめ、緊張した表情で走つて来た。

浦は、津田沼に命じてアメリカ兵の両手をうしろ手に縛り、かなりふとい立木の幹にくくりつけさせた。アメリカ兵はまったく無抵抗だった。飛行機が撃墜されたり、突然自分が捕虜にされたりしたことショックで、少しでもうになつてしまったのかもしれなかった。

また、津田沼という男は浦のじつに忠実な部下であり、かれは完全に浦に心服しているように思われた。浦は津田沼に対しても、少しも寛容なわけではなく、いばり散らして、こき使つていたのだから市木には、津田沼の心理状態は理解を超えていた。捕虜はそうやって立木に縛りつけられながら、まったくおとなしく、放心したようにくぼんだ青い眼を遠い空の彼方にそそいでいた。その眼は無表情のように映つたが、どこか遠いところから自分に向かつて差しのべられてくる救いの手を無心に待ち望んでいたのかもしれない。年齢の見当はつきかねたが、ひどく若いのかもしれなかった。もうそろ

そろ陽は沈みかけていて、捕虜の視線をたどつてゆくと、はるか彼方の空は朱色に染まってい、雲が内側に赤く燃える炎をふくんでみえるように見えた。

「猿はどうやって、このアメリカ兵をさがし出したのかな」

浦が市木に向かって言った。「こいつらは仲間じゃないのかな。何をたくらんでいるか、分かつたもんじゃない」

市木には、それは浦の思いすごしとか思われなかった。

「おい、市木、おれはいいことを思いついたんだ。エンリコにこの捕虜の始末をつけさせようじゃないか」

市木はびっくりして浦を見た。この男は、一体どういう知恵のまわり方になっているのだろう。

浦は捕虜をひとりにしておいて、少し離れたところにある灌木の茂みのかげにエンリコと津田沼と、そして市木を呼びよせた。浦は日本語と英語をまぜて、エンリコにお前はわれわれとずっといっしょにいたいのか、と聞き、エンリコはいと答えた。

「しかし、そのためには、お前はわれわれに絶対に服従しなければならぬ、つまりわれわれの言うことは何でも諾かなければならない」

浦が言い、エンリコはうなずいた。

「あのアメリカ兵はお前のともだちじゃないのか」

浦が言うと、エンリコはびっくりして、ノオと叫んだ。

「それなら、お前はあのアメリカ兵を撃つことができるか」

浦のいったことの意味は、すぐエンリコに通じたはずなのにエンリコは、どう答えていいのかわからないというふうに少しぼんやりしていた。どうなんだ、おい、と浦は地面を蹴りつけておどかしてみせた。

「オーケー」

エンリコは言った。浦は、どうだ、というようににやりと笑ってみせ、自分の拳銃から一発だけ残して弾丸を抜き、それをエンリコに渡した。

「われわれが見ていたら、お前も仕事かしくいだろう。われわれは小屋の方に帰る。お前がひとりであいつをやっつけるんだ」

浦はエンリコの肩をぼんと叩いた。それから浦は、エンリコの体をアメリカ兵のいるほうに押しやるようにし、わざとらしい素振りで小屋に向かって歩きはじめた。

弾丸は一発しか入っていないとはいへ、エンリコに自分の拳銃を渡した浦に、市木は得体の知れぬ恐怖と、それから嫌悪と反撥をおぼえた。しばらく歩いたところで、浦は足を止め、山の斜面に身をひそめた。津田沼もこれにならったが、市木は道に立ったままだった。

「猿はあのアメリカ兵の縄をほどこいて逃がすかもしれないぞ」

浦はむしろそれを期待しているふうであった。驚いたことに浦は、いつのまにかべつの拳銃を握りしめていた。こういう男は手に入れたと思えば、どんなものでも手に入れてし

まうのだろう。エンリコの出方によっては、この拳銃が火を吹くことになるわけだ。

市木も反射的に腰の拳銃に手をやった。しかし、市木はエンリコを撃ちほしないう。市木はむしろ、浦に向かって弾丸をめぐりこませてやりたかった。一分たち、二分たち、三分たった。浦は、うっとりしたような表情で耳をすませていた。

「おれは帰る」

市木はこれ以上、待つことに耐えられなかった。

「いいさ」

浦は言い、市木は歩きかけた、そのとき、銃声がした。市木は一瞬、立ちすくみ、だが、すぐアメリカ兵のくくりつけられている立木の方に向かって走って行った。

顔を血だらけにしたアメリカ兵、がうしろ手に立木に縛りつけられた姿勢で、暴れまわっていた。かれはどこかに向かつて走りだそうとするのだが、結果はただ大きな体をくねらせるだけに終わり、立木ははげしく揺れざわめいた。それはちょうど立木のために、かれが翻弄されているような恰好にだった。

そしてその前に、エンリコが拳銃を握った右手をだらりと下げ、何が起こったのかまったく理解できかねるというようにたたずんでいた。

「エンリコ」浦が言った。「お前、耳を撃ったな」

確かにアメリカ兵の左の耳はどこかに吹っ飛んでしまっていて、そこから血が吹きあがっていた。

「まさか、狙い撃ちしたわけじゃあるまい。いいか、よく見ておけ、こうやって撃つものだ」

浦はつづけて三発、アメリカ兵の腹のあたりに拳銃を撃ちこんだ。アメリカ兵の大きな上体はうしろ手に立木に縛りつけられたまま、前のめりに倒れ、宙ぶらりんに浮く恰好になった。

エンリコはいつのまにか、地面にべたんと坐りこんでしまっていた。

エンリコはアメリカ兵の左耳を撃ち落としたことで、浦によって一応存在を認められることになった。相変わらず敵の空襲は熾烈をきわめてい、市木はそのたびにエンリコといっしょに例の壕にもぐりこんだ。

まもなく第五戦区の高千穂山も米軍に攻略されてしまい、山頂で作業中のアメリカ兵の姿が、見張所に立って双眼鏡を使用すると、はっきり映った。司令が士官を招集した。

「第五戦区では、小隊長の台場少尉ほか数名が、勝手に戦線を離脱し、逃亡したということだ。敵前逃亡は銃殺だ。もしこの連中が現われたら、発見しだいすぐ報告するように。場合によっては射殺してもかまわん」

司令は言った。

市木は台場とはマルコットでよく顔を合わせていた。背の高い美青年で、学生時代はテニスの名手だったということだが、それだけにひよわな感じがした。

わがままで忍耐力に乏しかったから、戦線離脱もしかねなかった。市木は台場のような卑怯なふるまいはしたくなかったが、自分が実際にそういう状況に追いこまれてみないと分からないという気がした。

司令が訓示をたれている最中に突然、敵の砲撃を浴びるようになった。本部の小屋は、根こそぎおし揺るがされ、まるで地獄のようだ。即時退避せよということで、市木は例のかれ自身の小さな穴にもぐりこんだ。

砲撃は赤山の砲台からのものと思われた。市木は穴に身をちぢめて、ほっとした。もちろんこんな蛸壺でいどのものは、砲弾なり爆弾なりをまともにくらえば、いっぺんに吹っ飛ばされてしまう。それは分かっているくせに、穴の中に身を閉じこめると、大げさな言い方をすれば母親の胎内にもどったような、奇妙な安らぎがやって来た。けれども現実には砲撃につづいて空からの爆撃も加わっていたのである。

エンリコはどうしているのだろうかと思っていると、暗合のようにふいにエンリコがころがりこんで来た。

それはこの少年が最初、現われたときの状況と酷似していた。黒い影が風にあおられて、ぶわっと市木の前面におおい

かぶさって来た感じであった。ただ異なっているのは、最初のときはそれが何であるのか分からなかったが、いまは市木のはっきりと、そこにエンリコを見ていたことだった。

「エンリコ」

市木は壕から体を乗り出して、走りこんで来るエンリコを抱きとめようとした。ふいにエンリコの顔が何か眼に見えないものの力で、強くしぼりあげられでもしたみたいに歪んだ。同時にエンリコの体は静止した。ある運動の途中で、突然一切の動きが停止して、宙にびたっと貼りつけられてしまったというふうで、しかもそのとき、エンリコの存在は厚みや重量を失って一枚の薄い紙のように引き伸ばされた。少なくとも市木には、そんなふうに見えた。そう見えたと思ったのと同時に市木は、はげしい衝撃を受け、完全な空白の中に投げ込まれてしまったのだった。

市木が意識を失っていた時間がどれほどのものだったのか分からない。恐らく一分か二分くらいのきわめて短い間のことだったのだろう。

現実をとりもどしたとき、市木は小さな穴の中に頭を下にしてさかさまになって身をちぢめていた。市木はそのとき、奇妙にも自分は死んでしまったのだと思った。穴の中はもうろん真っ暗で、周囲には土の肌しか眼に入らなかったから、市木は埋葬されて墓穴の中で目ざめたのだと思った。

生きていたのだという実感はなく、これが死の世界なの

か、つまり死んでも意識は残るものなのだな、というふうに思った。きわめて本気に、かれはそう思った。

かれがはっきり生を意識したのは、空気を切り裂くような唸りとともに砲弾が飛んで来、つづいてすさまじい炸裂音があたりを揺るがすのを感じとったときであった。死者の世界で、砲弾が飛びかうはずはないと思ったからである。

助かった、と気がついたとき、かれは自分の体がひどく不自然な姿勢を強いられていることを発見した。

かれはゆっくり時間をかけて、少しずつ体をずらせながら姿勢を修正して行った。急激に体を動かすと、体がどこかではずれて、ばらばらにこわれてしまうような不安を感じたからである。事実、体はけだるかったし、どこということなく鈍い痛みがよどんでいるようだった。

それに、顔の上に何かが、うっとうしくおおいかぶさっているようだった。土か草か木の葉か、とにかくそういったものが、顔にへばりついているようだった。

それで市木は、両手でそれを払いのけた。それから気持を落ちつけて体に異常がないかどうか点検してみたが、まずよさそうだった。するとエンリコの身が心配になって来た。砲撃がおさまってから、市木は穴から抜け出したが、そのあたりにはどこにもエンリコの姿は見当たらなかった。気を失う直前の、きわめて短い時間のうちにエンリコの姿を見たように思ったのだが、あれは幻覚だったのか、という気もした。